

対話の場としてのミュージアム

ーフィンランドのエデュケーショナル・キュレーターに着目してー

山本 桃子

キーワード：ミュージアム、フォーラム、対話、フィンランド、エデュケーショナル・キュレーター

【要 旨】 ミュージアム（博物館・美術館）は資料の保存、研究、教育など様々な社会的機能を担っているが、現代的なニーズとしての双方向的な対話を促す機能、すなわちコミュニケーションの場としての役割に着目した研究は多くはない。本論の目的は、ミュージアムが対話の場として機能するための要素について検討することである。そのために、フィンランドの3つのミュージアムのエデュケーショナル・キュレーター（Educational Curator：以下EC）へのインタビュー調査を行い、ミュージアムのコレクションの枠組みを越えた「来館者の主体性を最大限に尊重する」というECに共通の態度を明らかにした。

フィンランドは近年、少子高齢化や晩婚化、難民や移民の流入による外国人人口の増加など、日本と共通する社会課題を多く抱えている。一方で、外国人居住者に対して「多様性を尊重しながらの統合」を目指し、誰もがアイデンティティを尊重される包摂的な社会の実現に近づいている。その方針はミュージアムにも例外なく採用され、乳幼児から高齢者まで、年代や性別を超えた対話の生まれる場を目指す同国のミュージアムの取り組みは、今後の国内のミュージアムのあり方を考える上で有用である。

本論では、ヘルシンキ市内にある3つのミュージアム、ヘルシンキデザインミュージアム、国立シネブリュコフ美術館、ヘルシンキ市立博物館のECへのインタビュー調査を行い、コレクションの内容が異なるそれぞれのミュージアムが対話の場として機能するためのどのような工夫をしているかを分析した。考察からは、各館が目指すミュージアムのあり方の共通点として、来館者がミュージアムをきっかけに自身の意見をアウトプットし、それを他人と共有することを非常に重視している点と、その実現のために来館者の主体性を最大限尊重し、訪れた人が安心してリラックスしながら発言できるような環境、空間づくりを実践している点が明らかになった。

1. はじめに

本論の目的は、変わりつつあるミュージアム（博物館・美術館）の社会的機能のうち双方向的な対話を促すコミュニケーションの場としての機能に着目し、フィンランドのエデュケーショナル・キュレーター（Educational Curator：以下EC）に焦点を当てながらミュージアムが対話の場として機能するための要素について検討することである。

ICOM（国際博物館会議）の博物館の定義によると「博物館とは、社会とその発展に貢献するため、有形、無形の人類の遺産とその環境を、教育、研究、楽しみを目的として収集、保存、調査研究、普及、展示する、公衆に開かれた非営利の常設機関である¹」とされており、これは1946年の組織発足当初の規約から大きくは変更されていない²。しかし、インターネットの発達やモノ・人の移動がグローバル化する現代において、このような博物館の定義だけでは不十分

であるという指摘の声は近年とりわけ大きくなっている³。最近では、2019年9月に開催されたICOM2019京都大会で新たなミュージアムの定義が議題にかけられる⁴など、現代におけるミュージアムの社会的機能は大きな変化の局面を迎えている。

様々な議論が交わされるなか、「文化のハブ (Cultural Hubs)」という研究／保管施設としてのミュージアムの機能と同時に「議論の場 (Places of discussion and debate)」としての機能も論点となっている。その背景には、多くの国や地域で顕在化している移民や難民をはじめとするグローバルな課題に対して当事者として関わる市民性の醸成が喫緊に求められている現状があり、それは学校教育のみならず社会のさまざまな公共機関が担わなければならない課題として、国の枠を越えた実践が重ねられている。

議論の場としてのミュージアムの機能は、「フォーラムとしてのミュージアム」と極めて近い。フォーラムとしてのミュージアムとは、文化人類学者の吉田憲司がダンカン・キャメロンの言葉⁵を引用してグローバル・ミュージアム（特定の地域や集団または国といった枠を超えて世界の諸芸術・諸文化を紹介するミュージアム）のあり方について述べた概念であり、「未知なるものに出会い、そこから議論が始まる場所という意味」で、「ミュージアムには、双方向的な対話性が必須のものとして要求⁶」される、というものである。

本論文では、対話を重視したミュージアムの取り組みや対話型の学習プログラムの先行研究を参照し、フォーラムとしてのミュージアムをより具体化するためにミュージアムがどのような場であるべきなのか、フィンランドのECに対するインタビュー調査をもとに考察する。

1-1. 研究背景と先行研究

本節では、前述のフォーラムとしてのミュージアムという概念についてより詳細に言及し、個別の実践例に当てはめて先行研究の検討を行っていく。フォーラムとしてのミュージアムは、誰もがアクセス可能でそこに集まる特定の人びとの言説空間であるという点において、ハーバーマスの提唱する「公共圏」と極めて近似している。ここで、ミュージアムの持つ公共圏としての性格について詳述する。

日本において、ミュージアムは公共施設として広く社会に認知されてはいるものの、「公共圏」としての位置づけは欧米に比べて同様になされているとはいえない。本論における「公共圏」は、ハーバーマスと齋藤による解釈を引用する。ハーバーマスは、宮廷が都市へと拡大した過程を文化の受容層の拡大とパラレルに論じ⁷、支配層に限定されていた文化財の大衆化を公共圏の成立の契機とした（文芸の公共性⁸）。また、齋藤は公共圏を「特定の人びとの間での言説空間である⁹」とし、「人びとの〈間〉にある共通の問題への関心によって成立する」¹⁰とその条件を指摘した。これらを踏まえ、本論ではフィンランドのミュージアムに焦点を当て、大衆化した文化・芸術を共通の話材として提供し、そのレスポンスとして年代や性別を超えた来館者同士の対話の生まれる場としてのミュージアムの可能性について検討する。

ところで、日本では「ミュージアムは静寂な場であるべきだ」という意識が欧米に比べて強く、毎日新聞の記事「美術館『会話OKの日』に賛否」¹¹によると「全国各地の美術館で、会話をしながら作品を鑑賞したいひとと静かに鑑賞したいひとの両方のニーズを満たすべく、

『トークフリーデー』や『会話を楽しむ日』といった名称の展示室で気兼ねなくおしゃべりのできる日を設定する試みが始まっている」と、近年一部のミュージアムで会話を許容する取り組みが始まっていることが報じられている。

一方で、同記事中で「美術館の会話に対する考え方には個人差があり、神奈川県立近代美術館葉山で約30名を対象にしたインタビュー調査では、9割以上が『会話を楽しむ日を継続しても良い』と答えた一方で、その日を利用するかという問いについて約3割が『その日は避けたい』と答え」るなど、ミュージアム内での会話の許容については様々な議論が重ねられている現状がある¹²。本論では「会話」と「対話」を同等に扱い、あらゆる人に開かれたミュージアムを目指すうえで、館内での来館者同士あるいはミュージアムスタッフと来館者の対話の重要性について検討したい。

国内ミュージアムでの対話型プログラムの実践例については、美術館での鑑賞活動を通じて子ども同士に信頼関係が生まれる、と指摘した新潟県立近代美術館の取り組み¹³や、JPタワー学術文化総合ミュージアム インターメディアテクでの学生ボランティアと小・中学生の複合教育プログラムであるアカデミック・アドベンチャー¹⁴等が挙げられる。これらの企画やミュージアムスタッフあるいはボランティアによるギャラリー・トークなど、対話型のプログラムは様々なミュージアムで行われている¹⁵。

前述の吉田も「(フォーラムとしてのミュージアムの実現のためには)すべての展示において、ワークショップやギャラリー・トークのかたちで、展示する側(=展示される側)とそれを見る側の『対話』のチャンネルが開かれていることが重要¹⁶」と指摘していた。

ミュージアムが提供する対話型プログラムの意義については、「展示する側」と「見る側」という異なる立場の者同士の対話はもちろん、「見る側」同士が展示について異なる意見を交わす場としての観点もある。従来は、前者のように異なる立場からの意見を交換する場として主に機能していた展示空間が、後者のように同じ立場同士での異なる意見を交える場になれば、コミュニケーションの場としてのミュージアムの機能はより拡張される。

このように、ミュージアムにおける対話の活発化の鍵は、学習プログラムの拡充はもちろん、年齢や性別や国籍を超え日常的にあらゆる人々が気兼ねなく訪れて対話を交わすことができる、広く開かれた場として社会的に機能することである。そこで、本論では、インクルーシブな社会の実現を目指すフィンランドにおいて公共圏として機能しているヘルシンキのミュージアムを対象に、対話の場としてのミュージアムの検証を行う。

1-2. 研究対象と研究方法

フィンランドのミュージアムを対象とする理由は、同国が少子高齢化、晩婚化、外国人移民の増加といった日本と同様の社会問題を抱えながら、2018年世界幸福ランキングで1位¹⁷を獲得するなど、包摂的な社会の実現を果たしているためである。様々な政策に加え、公共施設であるミュージアムもその一助を担っていると考えた。

とりわけ移民の増加については近年顕著であり、全人口に対する外国人人口の比率¹⁸を比較してみると、2000年1.8%だった外国人比率が2013年には3.8%と倍増¹⁹しており、移民や難民がこ

こ20年で急増していることがわかる。フィンランドでは1999年に難民や移民に関する法律が制定され、「受け入れが決まった移民や難民については、彼ら自身の言語や文化を尊重する。その一方でフィンランド語や文化を学ぶ機会を提供し、就労支援も行う。同化でもなく、放置でもなく、『多様性を尊重しながらの統合』を目指す²⁰⁾」方針が取られており、公共施設としてミュージアムも例外ではない。

一方、日本においても昨今増加する訪日外国人について様々な報道がなされている。ここでは観光目的（短期滞在）ではない在留外国人の増加、すなわち生活者としての外国人の増加に着目したい。2012年に203万人であった国内の在留外国人数は2017年には247万人になる²¹⁾など、日本で生活する外国人は着実に増え、異なる文化的背景を持った人たちとの共生が重要な社会課題となっている。

異文化への興味の啓発は、フォーラムとしてのミュージアムに内包される機能であり、国内のミュージアムには今後このような役割が求められるだろう。そこで、各時代の知性と芸術が蓄積されるミュージアムを、意見対立、実験、討論等の場として活用するためにはどうすればよいのか、フィンランドの事例を通じて検討したいと考えた。

対象とするミュージアムは、国立シネブリュコフ美術館、ヘルシンキデザインミュージアム、ヘルシンキ市立博物館である。これらは特定の国・地域の文化を紹介している点において、前述の吉田の提示した「グローバル・ミュージアム」の定義には必ずしも当てはまらないが、いずれの館もフィンランド語だけでなく英語やスウェーデン語など多言語表示を行っている点や様々な年代・地域の人々を対象とした学習プログラムやギャラリー・トークを行っている点から、フォーラムとしてのミュージアムの概念を検討する事例として妥当であると判断した。

インタビューは一人あたり約60分間で、2018年10月に筆者がフィンランド・ヘルシンキを訪問した際に各ミュージアムを訪れ、学習プログラムを専門的に企画するECと対面するかたちで行った。調査は半構造化インタビューの手法を採用し、インタビューの質問項目を事前に英文で送った上でその質問項目にゆるやかに沿うかたちで英語での聞き取りを行った。各館への共通の質問として、「ミュージアムをどのような場所として考えているか」「ミュージアムにおける学びとはどのようなものか」を尋ねた。

収集したデータは英語での文字起こしの後、筆者が日本語訳を行い、コーディングを実施した²²⁾。なお、インタビューデータは、コーディングに際し一部発言の順序を入れ替えた箇所もある。また、下線による強調は筆者によるものである。

2. エデュケーショナル・キュレーターへのインタビュー調査

はじめに、EC（エデュケーショナル・キュレーター²³⁾）というミュージアムのスタッフの職種について触れておく。フィンランドのミュージアムには、企画展や常設展ならびに館が所蔵するコレクションを活かした学習プログラムの企画を専門としたECが常勤のスタッフとして配置されている場合が多い。ECは美術大学で教育学を専攻した経歴や美術教師として高校での勤務経験を持ち、教育を専門とするミュージアムスタッフである。今回は、ヘルシンキ市内の3つのミュージアムのそれぞれのEC、デザインミュージアムのハンナ・カパネンさん、国立シネブ

リュコフ美術館のレーナ・ハンヌラさん、ヘルシンキ市立博物館のアンナ・フィニーラさんの3名（以下敬称略）のECにインタビューを実施した。

表1. インタビュー対象者一覧

所 属	役 職	名 前
ヘルシンキ デザインミュージアム	Educational Curator	ハンナ・カパネン
国立シネブリュコフ美術館	Educational Curator	レーナ・ハンヌラ
ヘルシンキ市立博物館	Curator of Education	アンナ・フィニーラ

2-1. ヘルシンキデザインミュージアム：ハンナ

ヘルシンキデザインミュージアム（Design Museum Helsinki、以下デザインミュージアム）は1873年設立の国立ミュージアムであり、フィンランドのデザインについて国内外に発信している。所蔵するコレクションは、デザインに関する12万5千点の画像、7万5千点のオブジェクト、そして4万5千点のドローイングである。

デザインミュージアムのECであるハンナ・カパネン（Ms.Hanna Kapanen）は美術大学で教育学を専攻して修士号を取得し、学校教員や子ども向けのプログラムを主に企画している。ハンナに「ミュージアムの意義とその実践」についてインタビューを行った。



図1. デザインミュージアム外観（筆者撮影）

H-Q1. あなたはミュージアムがどのような場所であると考えていますか？

Hanna（以下H）1: ミュージアムは、デザインのリテラシーを高めるための場所であると考えています。私たちのミッションは、デザインとデザインの歴史についての市民の理解を促進することです。そのために、ミュージアムの外、一般の人々やパートナー

機関と協力し、様々なプログラムに取り組んでいます。

デザインミュージアムの来館を通してデザイン・リテラシーに触れる。さらに、そのデザイン・リテラシーを高めることによって、人々の生活や心を豊かにするのがミュージアムの目的です。

ミュージアムの目的について、ハンナは市民のデザイン・リテラシーの向上という点を挙げた。これは、1873年にデザインミュージアムが設立された背景、すなわち当時の手工業に携わっていた職人の技術を保存し、彼らをサポートするための施設であった点も踏まえて理解する必要がある。つまり、単なる作品（ここではデザインに関するオブジェクト）の保護・保管の施設ではなく、市民にデザインに触れる機会を提供し、デザインへの理解を深めてもらうための教育普及施設としての役割を担っているということである。

では、そのデザイン・リテラシーを高める活動とはどのようなものなのか。

H-Q2. デザイン・リテラシーを高める取り組みとは

H2: われわれの理解では、全ての人間はデザインを理解することができます。なぜならば、みんなデザインを日常生活のなかで使っているからです。私はよく、子どもにこのイラスト²⁴（図2）を見せて「この中にデザインされていないものはあるか」と問います。そう、ここに描かれているものは全てがデザインされているのです。



図2. デザインに関するイメージ

ハンナは、日常の生活のイラストを用いて、子どもに問いかけをする試みをしていた。図2に示されたイラストは、日常の風景を切り取ったものであり、日常生活にいかに身近にデザインがありふれているかを示す好例である。ここに描かれているものは人工物のみならず、自然物である雲であってもデフォルメされ、デザインされている。

「この中にデザインされていないものはあるか」という問いかけは、子どもに限らず大人に対しても成立する。つまり「どこにデザインがあるか」という問いは子ども向けに作られたイントロダクションではなく、デザインミュージアムに来館する全ての人々を対象に、人々の生活とデザインとの距離の近さを想起させるために有効な手段である。

この点について、「われわれ（ミュージアムスタッフ）の中での共通認識として、子どもや大人など対象を限定せずに、みんながよく理解できるように展示やプログラムを企画する」という方針があることを語っていた。もちろん、時には子ども向け、大人向けの講座を作ることはあるが、「展示を来館者に伝えるときには子どもからお年寄りまで、みんなが理解できるように工夫している」と話し、デザインミュージアムが全てのひとに開かれたミュージアム、すなわちユニバーサル・ミュージアムを目指す様子が垣間見えた。

では、誰しにも開かれたデザインミュージアムとは、どのようなものか。ハンナは興味深いアプローチとして、子どもの意見をミュージアムが掬いあげるべきであるという見解を示した。

H-Q3. 誰しにも開かれたデザインミュージアムの役割とは、どのようなものなのか。

H3: 例えば、ミュージアムを通して来館者にデザインのことを紹介する、教える役割があります。でもそれ以外に、例えば子どもの意見をデザイナーに伝えることもミュージアムの役割だと考えています。これは、子どもにデザイナーの楽しさを与えるということです。

デザイナーが大人のためにデザインをするだけではなくて、社会のメンバーとして子どもも存在します。その子どもの視点、子どものニーズをいかに我々がキャッチし、どうやってデザインの中で具体化するか、ということを常に考えています。

デザイン・リテラシーとは、デザインの歴史を学ぶことで獲得される知識を指すのではなく、実際に社会の仕組みやプロダクトに対して自分の意見を表明するアウトプットの要素が強く内包されていることが、ハンナの言葉からは伺えた。

子どもは大人に比べて社会的に発言する場が多くはない。しかし、彼／女たちも社会のメンバーとして存在している。ここで注目すべきは、「大人が子どもの立場を想像してデザインし、子どもに提供する」という手法ではなく、あくまで当事者である子ども自身の意見をそのまま汲み上げようとするECの姿勢である。

「子どもにデザイナーの楽しさを与える」とは、子ども向けに用意されたキットの中で子どもが制作に取り組むということではなく、子どもが社会の一員としてある仕組みを考えるということを目指し、ミュージアムはそのための材料を提供していくべきであるとハンナは考えていた。

では、実際にどのような取り組みをもって、子どもにデザインを体験させているのだろうか。

H-Q4. このようなねらいを実現するために、実際にどのような取り組みを行っているのか

H4: 人間とデザインの間には、コミュニケーションが存在すると思っています。ある人がデザインしたものが世に出て、それが人々の生活に影響を与え、社会が変化する。

そこで今大切になってきているのが「コクリエーション (co-creation)」という考え方です。

具体的に、デザイン思考 (図3)を用いて、子どもの身近な問題に取り組む実践を行います。

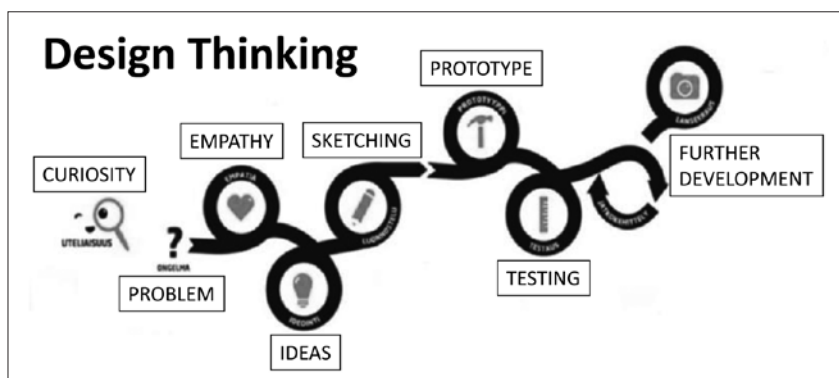


図3. デザイン思考 (Design Thinking) のモデル

例えば、①食堂の機能をよりよくしたい、という主題が子どもから出たとします。それについて共感が集まり、②クラスみんなで考えようということになります。では具体的に③料理に並ぶ列を再考しよう、とみんなで効果的な列のかたちを考えます。そして、④実際にその列で並んでみて、いろいろな立場の意見（各学年の生徒や教員の声）を聞いて改善します。

ハンナは子どもにデザインを体験させるための手段として、デザイン思考の実践について語った。これはハンナがファシリテーターとなり、子ども自身が直面している課題を子どもたちで改善させるプログラムである。この実施に際して、「重要な点は、子どもから発案された課題を子どもがみんなで一緒に考えること (co-creation) であり、決してECや教師が課題を押し付けることはあってはならない」と話した。H4のコクリエーションは協働とも言い換えることができ、ミュージアムでの学びとしてコミュニケーションによる他者との協働、共感を重視している点が明らかとなった。

ここまで、デザインミュージアムの教育的意義とその実践について、ハンナのインタビューから明らかにした。次に国立シネブリュコフ美術館のECであるレーナ・ハンヌラへのインタビューを分析する。

2-2. 国立シネブリュコフ美術館：レーナ

国立シネブリュコフ美術館 (Sinebrychoff Art Museum、以下シネブリュコフ美術館) はヘルシンキ市内にあり、14世紀から19世紀の古典美術品や調度品をコレクションの核とするハウスミュージアムである。1921年にロシア系商人のシネブリュコフ家の邸宅がミュージアムとして公開され、その後1975年に建物を政府が購入、1910年代の外装や建物内の家具の位置を可能な限り再現

し、現在国立美術館として一般公開されている。

同館のECであるレーナ・ハンヌラ（Ms.Leena Hannula）は、フィンランドの高校で美術教師を務めた後、シネブリュコフ美術館にECとして採用され、ここ十数年のミュージアムの学習プログラムの企画に携わっている。

L-Q1. あなたはミュージアムがどのような場所であると考えていますか？

Leena（以下L）1:ミュージアムは、過去の作品や歴史と現代の人々をつなぐ、イマジネーションを鍛える場であると思います。ここには14世紀から19世紀中盤の外国の芸術作品が多く、フィンランドの人々にとってそれらは非常に縁遠いものです。つまり、人々は通常、現代美術やフィンランドの古典芸術に興味を持つ傾向にあるので、私たちは常にとても素朴なところからスタートする必要があります。

前述の通り、シネブリュコフ美術館はロシア出身の商人の邸宅をそのまま公開したミュージアムであり、歴史的に1917年のフィンランド独立以前の美術品が多い（図4）。つまり、それまでフィンランドを支配していたロシアやスウェーデンから輸入された調度品や芸術作品が大半を占めているという点において、時間的地理的ともに現代のフィンランドの人々にとって興味を抱きにくい対象である、とレーナは語った。だからこそ、「素朴なところからスタート」することによって、来館者とアートをつなぐイマジネーションを鍛えることができる、と認識していた。

次に、「素朴なところからスタート」とは具体的にどのようなことを指すのか質問した。



図4. シネブリュコフ美術館の展示室（筆者撮影）

L-Q2. 「素朴なところからのスタート」とは？

L2: 例えばミュージアムツアーで作品について話すとき、私たちは常に展示作品から、人々がアイデンティティを感じることができるよう、作品から一部の文脈を切り取って問かけます。18世紀の婦人の肖像画を見るときには、「あなたはこのファッションに

ついてどう思いますか」、「あなたは自宅のクローゼットに何着の服持っていますか？」と問いかけ、彼らはその時、自分自身について考えます。

次に私は「当時は2つのドレスしか持てず、高価な織物を汚さないように非常に注意しなければならなかった」と伝えます。私たちは絵画の歴史について話すことができますが、まず初めに来館者が自分自身の日常と目の前の作品とをつなぐきっかけを与えます。

歴史的に古いものは来館者と心理的距離が離れているからこそ、緊張せずにリラックスした状態で来館者が普段の自分と結び付けて鑑賞することが必要である、とレーナは語った。さらに「イメージネーションを鍛える」ための工夫として、いきなりスタッフが作品に関する知識を披露するのではなく、一度来館者が自分自身について考える機会を与えることを実践していた。

ミュージアムは緊張感を抱く場所であるべきではない、という考えについて、レーナはさらにミュージアムスタッフの態度についても言及した。

L3：一例として、フィンランドの学校システムはとても民主的です。われわれは多様な学びの手段を持っています。そのような環境はシビアなものではなく、例えば子どもは教員のことを「Mr.〇〇／Ms.〇〇、〇〇先生」といった敬称ではなく、名前で呼びます。そのように、私は子どもや人々がミュージアムを訪れた時にその場所を信頼できるように、いつもミュージアムのスタッフが来館者に対してとてもフレンドリーであるように心がけます。

L1では、外国の古典芸術作品というシネブリュコフ美術館のコレクションが抱える課題とそれに対する工夫が語られていた。一方で、L2の「来館者自身が普段の生活を振り返る機会を設定する」という点は、デザインミュージアムのハンナの発言「具体的に、デザイン思考を用いて、子どもの身近な問題に取り組む実践を行います。」(H4)と、当事者(子どもを含む来館者)の思考およびアウトプットを積極的に促すという意味で共通している。

次に、開かれたミュージアムとそこで行われる学びについて質問した。

L-Q3. 誰しにも開かれたミュージアムとは、どのようなものなのか。

L4：最も重要なことは、来館者が次回また来たいと思うようなミュージアムであることだと思います。彼らは必ずしも強制されて学ぶ必要はありません、なぜなら彼らはいつでも学んでいるからです。

例えば、学習に困難を抱えた子どもがミュージアムへ来た場合、それは非常に前向きな経験です。なぜなら、彼らが芸術作品を観るとき、それは非常に個人的な経験で、間違えの存在しない経験だからです。重要なのは、子どもを預かったスタッフがどのように彼らに話しかけるかという点で、スタッフは子どもたちに対して敬意を払うべきだと考えます。

ここでは、来館者がミュージアムを訪れたときの体験について語られている。レーナはECでありながら「必ずしも学ぶ必要はない」という立場に立ち、ミュージアムでの作品を観る経験こそが非常に個人的でかけがえのないものであると語った。とくに「間違えの存在しない」という点において、日常の教育との違いを強調していた。

ミュージアムならではの学びの特徴として、レーナは「ミュージアムでは、物事をシンプルに考えるのではなく、常に複雑な考えを持ち、頭の中に疑問を抱くことを推奨」する点を挙げた。ミュージアムの外では、たとえ疑問を抱いた場合にも時に気づかないように振る舞うことを求められる場面が多く存在する。しかし、ミュージアムでは普段見過ごしている疑問に正面から向き合い、思考を深めることができる。これこそがミュージアムにおける学習の特徴であり、ECはそのための機会を提供するべきである、とレーナは語った。

では、この思考を深める営みは個人の中で独立して行われるものなのだろうか。「私はいつも『なぜ（このプログラムを）ミュージアムでやらなければならないのか、家などのプライベートな場で出来ないことは何か』ということ問い続けている」とレーナは話し、閉じられた環境ではなく公共の場であるからこそ、できるだけその個人が問い続ける過程を他人と共有できるようにすることが重要だと語った。

L-Q4. ミュージアムでの学びを実現するために、実際にどのような取り組みを行っているのか

L5: 先ほど話したオープンでフレンドリーなマインドを持って、来館者に問いかけを行っています。例えば、以前私は論文のなかで高齢者とそのミュージアムへの認識を取り上げました。初めて高齢者がミュージアムを訪れた場合、あなたがスタッフだとすると「ああ、老人だ」と思うでしょう。しかし、同じ高齢者が二度、三度と来館した場合には、あなたはその人について少し知り始め、最初とは異なる雰囲気で接することになるでしょう。「私はミュージアムへ行く、なぜなら人々が私のことを知っていて、私はとても歓迎されていると感じるからだ。」とある老人は話しました。これは、とても大事なことです。

来館者が、ミュージアムへ来て歓迎されている、という印象を抱くように、常に展示やプログラムを工夫しています。

レーナの発言からは、人々にミュージアムへ足を運んでもらうために、展示やプログラムを用いたオープンで寛容な雰囲気づくりを非常に重視している様子が伺えた。これは、ミュージアムでの学びの際に、来館者がミュージアムのスタッフや来館者同士で相互にコミュニケーションを取る際にも共通する点である。レーナは、お互いの意見に耳を傾け、オープンな気持ちで自分と異なる意見を受け止める、そのような場としてミュージアムはあらゆる世代にとって重要であるとし、次のように話した。

L6: 例えば、この彫刻に対してあなたは美しいと感じ、一緒に見学していたグループの半分がそうではないと言ったとします。ここでは、正解も間違いもなく、個人が自分の意見を安心して発言できるのです。つまり、なぜ美術館が人々にとって重要なのか、

それはパブリックな場所で意見を表明する経験を得られるからです。

そのような体験をした場合、彼ら（来館者）は年を経てもここに来ることに慣れており、彼らにとってここは来ることを恐れる必要はないオープンな場所として位置づけられます。フィンランドでは特に、孤独は非常に深刻な問題です。ミュージアムへ行けば、あなたはいつも他の人と出会うことができ、ミュージアムのスタッフはいつも友好的です。

レーナはこのほかに、「オープンなマインド」の具体例として、子どもの持つファンタジーについて言及した。それは、「子どもは子どもならではの多くのファンタジーを持っていて、ミュージアムではスタッフがそれらを否定せずにそのまま受け入れるべきだ」というもので、「なぜならそれが、子どもらしさにつながるから」とであると話した。

このように、ミュージアムを訪れた来館者のことばのありのままを尊重し、許容する姿勢は、2-1でのデザインミュージアムのハンナの発言と重複する部分が見られた。

2-3. ヘルシンキ市立博物館：アンナ

最後に、ヘルシンキ市立博物館のECであるアンナ・フィニーラのインタビューを分析する。ヘルシンキ市立博物館（Helsinki City Museum）は1911年に設立された公立のミュージアムで、ヘルシンキの歴史や文化について国内外に向けて発信しており、2017年にはInternational Museums + Heritage Awardでグランプリを受賞するなど、近年様々なメディアから注目されているミュージアムである。そのコレクションは、写真約100万点、考古学資料9万3千点、アートワーク6千点で、オンライン上でも約5万点の写真が公開されている。

ヘルシンキ市立博物館のECであるアンナ・フィニーラ（Ms. Anna Finnila）は20年間同館に勤務しており、2012年に新たにオープンした「チルドレンズタウン（Children's Town）」（図5）という乳幼児も楽しめる常設展示の企画者でもある。



図5. チルドレンズタウン内の衣装部屋で着替えた子どもたち（筆者撮影）

A-Q1. あなたはミュージアムがどのような場所であると考えていますか？

Anna（以下A）1：異なる世代の人びとが、気軽に出会える場所であればいいと思っています。2016年のリニューアル・オープンの際に、どうしたらもっと人々が気軽に訪れることができるミュージアムになるか、考えました。そこでたどり着いたのは「リビング」というコンセプトでした。小さな子どもたちはエントランスのカーペットの上でフルーツを食べ、作業をする人たちは椅子に腰かけて、リラックスした状態で子どもたちを見守ることができる、そんなエントランスを作り、誰もが気軽に立ち寄れる空間にしました（図5）。

アンナは、ミュージアムのあり方について、教育的な目標よりもまずはじめに異世代の人たちの出会いの場としての機能を強化したいと語った。そのために、家のリビングのように、誰もが寛げる空間をエントランスに設け（図6）、乳幼児から高齢者まであらゆる人々が仕切りのない場所で共存できるように配慮するなどの工夫を施していた。実際に、エントランスホールには、乳幼児向けのマットからひとり掛けのソファ、ウッドスツール、カウチチェアなど様々なかたちの椅子が用意され、来館者が自分の好みで選べるようになっていた（写真に写っている動物のオブジェも使用可）。

次に、そのような空間で行われるミュージアムでの学びについて質問した。



図6. ヘルシンキ市立博物館のエントランス（筆者撮影）

A-Q2. ミュージアムでの学びとは、どのようなものなのか。

A2: ヘルシンキ市立博物館では、4つの教育目標（Pedagogical Goals）を掲げています。それは

- ①国の歴史や地元のエリアについて知識を深める
- ②歴史の流れの中に一人ひとりを位置づけるディスカッションのための素材を提供する
- ③経験と衝動を与える

④単に情報だけを提供するのではなく、思考や省察のためのツールを提供する、です。

ミュージアムの展示は本やインターネットとは異なるメディアです。ミュージアムは新たなものに出会う場であり、その出会いをシェアする場です。家族や友人、時には見知らぬ人と、その感動を共に分かち合うことがミュージアムならではの特徴なのです。

ここでは、単なる知識教授の場ではなく、来館者が主体的に考えるための素材やツールを提供することがミュージアムの教育目標として掲げられていた。とくに、②では来館者一人ひとりが歴史のなかに自らを位置づけ、それを他人と共有（ディスカッション）するところまでが想定されているなど、協働が重視されていた。

さらにアンナは、ミュージアムでの学びの特徴として、展示を見ることで新たなものに出会うだけでなく、その出会いの感動を知人や見知らぬ人とシェアすることを指摘した。

3. 考 察

ここまで、3つのミュージアムのECへのインタビュー調査の分析を行ってきた。分析からは、各館のECがそれぞれ自館のコレクションの内容を活かしたアプローチを行っている点が明らかになる一方で、それらのアプローチによって目指すミュージアム像には共通する点も多く見られた。

3-1. ミュージアムごとに異なるアプローチと共通するゴール

デザインミュージアムでは、デザイン・リテラシーというキーワードに基づいて、誰もが新しい仕組みをデザインする体験ができるように、デザイン思考に基づいたプログラムが実施されていた。シネブリュコフ美術館では、スタッフによるギャラリー・ツアーの際に、外国の芸術作品のコレクションを通じて来館者のイマジネーションを鍛える機会になるように、目の前の作品の文脈の一部を切り取り、観る人がアイデンティティを感じられるように工夫されていた。ヘルシンキ市立博物館では、乳幼児も楽しめるチルドレンズタウンが常設され、4つの教育目標のもとヘルシンキの歴史や知識を体験的に学べるように展示や空間デザインが作られていた。

これらの実践の差は、各ミュージアムのコレクションの内容の違いに起因するところが大きい。しかし、美術館や博物館といった枠組みを超え、各ECが目指すミュージアム像については、共通点も確認できた。ECのコメントに共通する特徴を図7に示した。

例えば、ハンナの「デザインをする過程で意見を述べ周りと共有する経験によって、子どもは自分が社会を構成する一員であるという自覚が芽生える」という学習プログラムのねらいは、レーナの「鑑賞を通じて、正解や不正解のないパブリックな場で個人の意見を安心して発言できる。そのような場として、ミュージアムはあらゆる世代にとって重要である」というコメントやアンナの「ミュージアムは新たなモノに出会い、その出会った感動を他人とシェアするための場で、その点において本やインターネットとは異なるメディアである」という指摘と通底している。すなわち、3名のECは来館者がミュージアムへの来訪をきっかけに自分の意見をアウト



図7. 各館のECが考えるミュージアムのあり方

ブットし、それを他人と共有することを非常に重視している。このことから、ECが日常のなかで自然に対話の場としてミュージアムを機能させている様子が伺える。

またその際の重要な点として、あくまで来館者当人の意見を尊重し、ミュージアムのスタッフは来館者が安心してリラックスしながら発言できるような環境、空間づくりを目指す必要がある、という指摘もECに一貫して見られた共通点であった。つまり、ECは来館者自身の主体性を最大限に尊重することをミュージアムの学習における最大の使命として認識していた。

さらに、上記のような機会を提供するために、まず来館者が気軽に訪れることができる場である必要がある、という考えも共通しており、そのために、すべてのひとに開かれた場、フレンドリーなマインドやあらゆる人たちがリラックスできる空間といったアプローチが取られていた。

3-2. オープンダイアログとの共通点

ここまで考察してきた「当事者の声の重視」や「専門家によるトップダウンではない、フラットなコミュニケーションと意見の共有」といった対話の枠組みは、オープンダイアログ（OD）の考え方とも類似している点が多い。ODは精神療法のセラピーの場で用いられる手法であるが、その本質は『技法』や『治療プログラム』ではなく、『哲学』や『考え方』である²⁵⁾とされているように、ミュージアムを対話の場として機能させるための示唆が多く含まれている。例

えば、ODにおいてはファシリテーターはメンタルケアの専門性を求められるものの、「専門家が指示し、患者が従う」といった上下関係は一切存在せず、専門家と患者が完全に相互性を保った状態で対話をするフラットな関係性や、たとえ意見が対立しても、あらゆる声の存在が許容され、傾聴とやり取りが推奨される²⁶など、ECたちが語ったミュージアムのあり方と重なる部分が多い。

ODの実践のための12項目²⁷の中には、「開かれた質問をする」「今この瞬間を大切にする」「複数の視点を引き出す」「対話において関係性に注目する」「不確実性への耐性」など、ミュージアムで行われるプログラムにも適用可能な項目が多く存在する。フィンランドで実践が重ねられている²⁸この手法が明示的にECに伝わり各ミュージアムに採用されているのか、あるいは意図せずにECたちが実践しているのか、この点は本論で明らかにするとは出来なかったが、このような考え方がミュージアムのあり方やプログラムのデザインに活用し得ることは、本論の示唆するところである。

結 語

本論では変わりつつあるミュージアム（博物館・美術館）の社会的機能のうち、双方向的な対話を促すコミュニケーションの場としての機能に着目し、ミュージアムのコレクションの枠組みを越えたミュージアムの姿勢を検討した。

各館のECへのインタビューの分析から、来館者によるアウトプットやミュージアムでの対話を促すために、それぞれのコレクションを活かした異なるアプローチが取られていることが明らかになった。また、それぞれの館の学習プログラムの実践から、ECが日常のなかで自然に対話の場としてミュージアムを機能させている様子が伺えた。乳幼児から高齢者まで、年代や性別を超えた対話の生まれる場としての社会的機能を目指すフィンランドのミュージアムの姿勢は、今後の国内のミュージアムのあり方を考える上で非常に有用である。すなわち、地域のコミュニティの希薄化や多文化共生が叫ばれる日本においても、来館者の発言を促し対話を共創するミュージアムを実現するために、ミュージアムのスタッフのマインドや空間設計も含めた対話のための雰囲気づくりを考慮する必要がある、という示唆が得られた。

さらに、考察からはECが来館者自身の主体性を最大限に尊重することをミュージアムの学習における最大の使命として認識していた点が明らかになった。それぞれの主体性を尊重するために、「コミュニケーションや協働の重視／意見の傾聴」「誰もが気軽に足を運べるミュージアムづくり」といった工夫が、各ミュージアムの学習プログラム中でなされていた。

もちろん、先述の通りミュージアム館内での声の問題については今一度議論する必要があることも事実であるが、乳幼児のように「静寂」と親和性の低い年齢層に対しても開かれたフィンランドのミュージアムは、これからの国内のミュージアムの運営を考えていく上で新たな方向性を提示している。

学芸員の社会的地位が欧米に比べて低い国内の状況と比較し、これらは教育を専門としたECがいるからこそできる取り組みではないか、という指摘もあるだろう。日本ではまだ一般的ではないECの役割をより詳細に検討するためには、その研修内容やフィンランド国内のミュージア

ムでの設置状況、どのような資格が求められるのか、などのより詳細な情報を得る必要がある。また、本論では学習プログラムを企画・運営しているECの声を聞いたが、ミュージアムの機能を議論するためにはプログラム参加者の声を聞き、どのように受け止められているのか実際の反応を明らかにしなければならない。これらは今後の研究課題としたい。

◆本研究はJSPS 科研費 JP12345678の助成を受けたものです。

注

- 1 ICOM <https://icom.museum/en/>, ICOM規約第3条第1項 https://www.j-muse.or.jp/icom/ja/pdf/ICOM_regulations.pdf (2017年6月改訂)。
- 2 美術手帖Web版 2019年8月30日「日本初開催。ICOM（国際博物館会議）京都大会で「Museum」の定義が変わる？」<https://bijutsutecho.com/magazine/news/headline/20458>
- 3 美術手帖Web版 2019年9月3日「ミュージアムは「文化のハブ」になれるのか？ ICOMが問い直す「博物館」の定義」<https://bijutsutecho.com/magazine/news/report/20480>
- 4 大会最終日の2019年9月7日に新たな「Museum」の定義が議題に上がったものの、協議が不十分であるという声が各委員会から上がり、採択見送りとなった。
参照：<https://icom.museum/en/news/the-extraordinary-general-conference- postpones-the-vote-on-a-new-museum-definition/>
- 5 Cameron, Duncan, 1972, "The Museum: a Temple or the Forum", *Journal of World History* 4(1): 189-202.
- 6 吉田憲司『文化の「発見」驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』岩波書店、1999年、pp. 212-236.
- 7 ユルゲン・ハーバーマス (1994)『公共性の構造転換』未来社、pp. 50-64、72-78。
ハーバーマスは「芸術作品が通人 (connoisseur) の頭越しに広汎な公衆に直接に接触するようになるにつれて、(中略) 彼らの機能は不可欠となった。この機能は今や、職業的芸術批評にうけつがれるのである」(p61) とした。
- 8 同上。
- 9 齋藤純一『思考のフロンティア 公共性』岩波書店、2000年、px.
- 10 同上、p92 (点による強調は原著者による)。
- 11 毎日新聞 2017年12月13日東京朝刊「美術館『会話OKの日』に賛否」：<https://dbs-g-search-or-jp.ez.wul.waseda.ac.jp/aps/WSKR/main.jsp?ssid=20190925194102934gsh-ap01>.
- 12 最近では、2019年1月16日のネットニュースで「美術館は私語厳禁？『小声で喋ってたら注意された』で賛否『有名なうんちくを間違い混じりで説明するのは気になる』と報じられるなどインターネット上での議論も活発で、「会話の内容にもよる」という意見も出ている。
(「キャリアコネニュース vol. 7847」参照：<https://news.careerconnection.jp/?p=65658>)
- 13 青木善治「考える力、表現する力、自己肯定感を育むための鑑賞活動の試み」『美術教育学研究』48(1)、大学美術教育学会、2016年、pp. 1-8.
- 14 寺田鮎美・上野恵理子「学校対象教育実験プログラム『アカデミック・アドベンチャー』」『東京大学総合研究博物館ニュース ウロボロス』第53号 (vol. 19 No. 3)、2015年、pp. 13-15. その教育学的見地からの検討は、山本桃子「大学博物館における学習機会の検討ーボランティア活動を事例にー」『早稲田大学教育学研究科紀要別冊』vol. 23(2)、2015年、pp. 49-59参照。
- 15 ニューヨーク近代美術館 (MoMA) で実施された対話型プログラム、ヴィジュアル・シンキング・

ストラテジー（VTS）が国内にも広まるなど、来館者との対話を重視したプログラムは増加している。VTSについては、フィリップ・ヤノウイン『どこからそう思う？学力をのばす美術鑑賞 ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ』淡交社、2015年を参照。

- 16 註1に同じ。
- 17 “World Happiness Report 2018” 参照：<https://worldhappiness.report/ed/2018/>
- 18 OECD編著『図表でみる世界の主要統計 OECD ファクトブック2015-2016年度版』明石書店、2017年、pp.20-21.
- 19 ちなみに、日本の全人口に対する外国人人口の比率は2000年1.3%、2013年1.6%とフィンランドに比べると緩やかではあるが上昇傾向にある（出典、同上）。
- 20 NHK「外国人“依存”ニッポン―「世界一幸せな国」フィンランドと「福祉の取り合い」」（2019.05.29）：<https://www.nhk.or.jp/d-navi/izon/column/190529.html>
- 21 法務省「在留外国人統計」http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html
- 22 収録にあたっては、本人に同意の上ICレコーダーを使用して録音しデータ収集を行った。
- 23 本論においては、ミュージアムで学習プログラムを企画する役職として、Educational Curator と Curator of Education を併せてエデュケーショナル・キュレーターと呼称する。
- 24 Marjo Kenttala, *Muotoilola!*, Opinkirjo, 2009.
<https://opinkirjo.fi/wp-content/uploads/2018/12/muotoilola.pdf>
- 25 斎藤環『オープンダイアログとは何か』医学書院、2015年、p20.
- 26 同上、pp.24-27.
- 27 同上、pp.46-47.
- 28 オープンダイアログは、フィンランドのユヴァスキュラ大学教授の臨床心理士ヤーコ・セイックラ氏を中心に、1980年代から西ラップランド地方で臨床が重ねられている手法である。

フィンランドのミュージアムに関する参照URL（最終閲覧日2019年9月25日）

Helsinki Design Museum

<https://www.designmuseum.fi/en/about-us/>

Sinebrychoff Art Museum

<https://sinebrychoffintaidemuseo.fi/en/house-museum/history-of-the-museum-building/>

Helsinki City Museum

<http://www.helsinginkaupunginmuseo.fi/en/>